記念講演・要旨

『開成をつくった男・佐野鼎（さのかなえ）』の取材から見えてきた小栗忠順との接点

作家　柳原三佳

ご紹介いただいた柳原三佳と申します。（拍手）

昨夜は「はまゆう山荘」というお宿に泊めていただきました。この施設は昭和六十二年、当時、倉渕村と友好都市提携を結んでいた横須賀市によって建てられたそうです。お風呂は「含鉄泉」と言って鉄分が多く含まれており、その成分は、西では兵庫県の有馬温泉、東では群馬県の「はまゆう山荘」がトップクラスと言われており、全国的にも大変珍しい泉質とのことです。

今回の講演タイトルに登場する佐野鼎は、私の母方の傍系の先祖にあたります。東京にある中高一貫の開成学園は、岸田総理大臣の母校としても知られていますが、その学校を創設した人物が佐野鼎でした。

実は、その佐野鼎は一八六〇年、小栗さまと一緒に万延元年遣米使節の従者として地球を一周し、明治維新の八年前に、すでにアメリカをはじめとする世界の国々を見ていました。そこで、小栗さまや佐野鼎が訪問先のアメリカで見たであろう風景、また旅先でのエピソード、そして佐野鼎の目から見た小栗さまと、その接点について、スライドを紹介しながらお話しできればと思っております。

講　演

友人の事故死をきっかけに

私はこれまでフリーのジャーナリストとして、長年、事件や事故を取材してきました。

学生時代からオートバイが好きだった私は、大型二輪免許も取得し、ナナハンに乗ってツーリングにもよく行っていました。バイク雑誌の編集部に入社してからは、全国各地を取材していました。そんな中、親しい友人がバイクで続けて命を落としたのです。彼らは、二人とも悪い運転をするような人ではなかったのですけれど、「バイクの若者」という先入観で、一方的に悪く見られてしまうのでしょうか、事故は簡単に処理されて終わってしまいました。そういう経験もあり、警察の初動捜査や司法による事故処理に疑問を感じ、取材を始め、多くの記事や本を執筆してきました。

冤罪事件を取材することも多いのですが、過酷な体験をされた当事者にお話を伺うたびに、「罪なくして斬らる」の小栗さまのことを思い出している自分がいます。

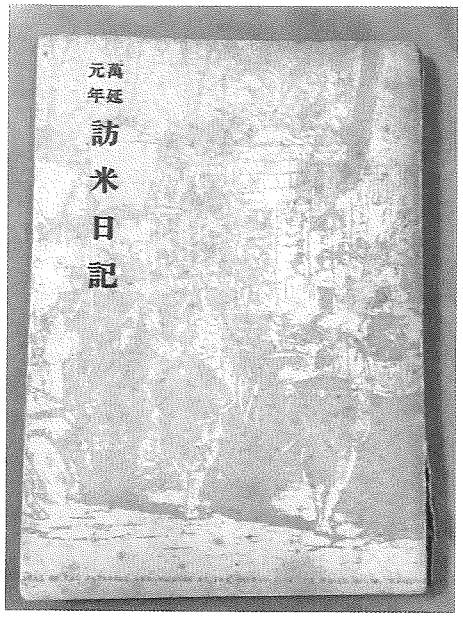
一冊の古書との出会い

二〇一八年の年末に出版したのが、初めて歴史をテーマにした『開成をつくった男、佐野鼎』（講談社）でした。

この本を書くことになったそもそものきっかけは、子供の頃、明治二十六年生まれの祖父・佐野清から何度も聞いていた「ウチのご先祖には、咸臨丸に乗って勝海舟と一緒にアメリカへ行った人がいる。山岡鉄舟とも親しかったらしいよ」という言葉でした。

今から十年ほど前、ネットでそのご先祖の名前を検索したところ、『萬延元年訪米日記』という、昭和二十一年に出版された一冊の古本が見つかりました。著者は佐野鼎です。どうしても読んでみたいと思いましたが、出版当時定価十円の本が、なんと二万七千円もしているではありませんか。一瞬、「高いなあ」と迷いましたが、母が「じゃあ、半分出してあげるから買ってみたら？」と言ってくれたので、ありがたく援助を受け、なんとか入手することができました。

古書店から送られてきた本は、終戦の翌年に出版ということもあり、ボロボロのワラ半紙のような紙でした。しかし目次を見てびっくりしました。ホノルル、サンフランシスコ、パナマ、ワシントンという外国の地名が次々と出てきます。「ヒレドルヒア」はフィラデルフィアのことですね。「日米金銀貨の比較」という言葉や、喜望峰、香港……などなど、地球を一周したことがわかる目次がズラッと並んでいるのです。



佐野鼎著『萬延元年　訪米日記』

当時は鉛筆などありませんので、もともとは筆書きの日記です。この本はそれを活字にしたものでした。佐野鼎自身は、矢立の筆で和紙にメモ書きし、それを後で清書したのでしょう。カメラもコピー機もないあの時代に、詳細に記録していたわけです。

こちらの画像は金沢市の玉川図書館収蔵の佐野鼎が書いたとされる世界地図（口絵）です。幕末にご先祖はこんな地図を書いていたと非常に驚き、ショックを受けました。

「咸臨丸」ではなく「ポウハタン号」だった

さらに驚いたのは、祖父から「ご先祖が咸臨丸に乗ってアメリカへ渡った」と聴いていたのに、実際は「咸臨丸」ではなくアメリカが差し向けた軍艦・ポウハタン号に乗っていったということでした。これは、かの東善寺の和尚さまですら「私も若い頃は咸臨丸だと思っていました」と仰っているくらいですので、祖父がそのように思い込んでいたとしても仕方がないことなのかもしれません。

今日、私が身につけているこのスカーフは、万延元年遣米使節子孫の会の代表理事で副使・村垣淡路守のご子孫、宮原万里子さんが私にプレゼントしてくださったものです。この図柄がまさにポウハタン号なんですね。東善寺にも精巧な模型が展示してありますが、こういう船に乗って、佐野鼎は小栗さまとともに、世界を一周する旅にご一緒させていただいた、というわけなのです。

佐野鼎たち蘭学者は当時、オランダ語は勉強していましたが、英語の知識はそれほどありませんでした。しかし、これからは英語が必要になるということで、ポウハタン号の上で毎日ヘンリー・ウッド牧師さんから英語の授業を受け、一生懸命勉強したそうです。もちろん、当時は英和辞典や和英辞典はありません。

私たちは歴史の授業で「江戸時代の日本は鎖国」と教えられ、外国人と喋ってはいけないくらいのイメージだったのに、あの時代にこんなことをしている日本人がいたことにまた驚かされました。私達が習った歴史は本当なのかと強く疑問を感じました。

佐野鼎は私の母方の先祖ですが、直系ではなく傍系になります。母の佐野が本家筋で傍系に鼎がいます。母の曽祖父が佐野鼎ととても親しかったという記録は残っています。写真の（カラー口絵）左が佐野鼎、右が私の祖父佐野清です。傍系とはいえ、こうして並べると二人の顔の輪郭などがよく似ていますね。鼎は渡米の翌々年「文久遣欧使節」の随員としてヨーロッパにも行っているのですが、これはパリで撮影した写真です。

祖父・清の生家は欧米から輸入した舶来の時計店をしていたらしく、今思えば鼎が欧米との交流があったので、このような商売をしていたのではないかと思われます。

出版のきっかけ

さて、あまりにも『訪米日記』が面白かったので、私はこの話を『七十七人の侍　海を渡る』といった子供向けの物語として出版できないかと考えていました。ところが、編集者から「いや、これは一般書で行きましょう」と言われたのです。私は歴史の専門家ではありません。これまで、そこにいる人からお話を聴き、そこにある出

来事を書く、つまりノンフィクションを書く仕事をしてきました。そんな私にとって、取材対象者がすでにみんな亡くなっていて、誰からも直接話を聞くことができないというのは、高いハードルでした。でも、それは仕方がありません。そこで、残っている史料、書かれた論文を徹底的に調査し、できるかぎり彼らが歩いた場所を訪ねるしかないと腹をくくったのです。

佐野鼎はコレラに罹患し、明治十年に四十九歳で亡くなっています。当時コレラで亡くなると身の回りの品を全て焼かれてしまったそうですから、特に資料がなく、調査は難航しました。特に、佐野鼎の四十九年は、当時としては稀な人生でした。江戸時代は藩に縛られ、普通は自分の藩から出ない人生が大半だったと思われます。しかし、佐野鼎は四十九年の人生において、日本各地にとどまらず、世界各国、実にさまざまな場所に足跡を残していたのです。

佐野鼎の人生

佐野鼎は一八二九年に富士山の麓で生まれました。小栗さまがその二年前に生まれていますので、ほぼ同年代です。私の母の本家筋は代官でしたが、分家の鼎は子供の頃から和算をよく勉強していたようです。

富士山の麓の富士川はよく氾濫しました。その都度、畑が流されたりしますからそういう地域では測量が必要となり、数学に長けた人物が出るそうです。佐野鼎もそういうことで算術をしっかり勉強したのではないかと思われます。これは、当時の青年たちが和算を学んでいたときのノートです。博物館などに残っていますが、とても難解で私にはさっぱりわかりません。

佐野鼎は十六、七歳の頃、江戸へ行き、当時蘭学や西洋砲術を教えていた下曽根塾に入りました。そこで頭角を現し、二十歳前に塾頭に。そして、二七歳のとき、第一回長崎海軍伝習に参加します。佐野鼎にとって人生の大きな転機となったのはおそらくこの一年だったといえるでしょう。勝海舟もこのとき伝習生で参加していました。

ただし佐野は頭がよくても幕臣ではなく、身分が低かったので、正式な伝習生名簿には名前がありません。いろいろ調べて、ようやく「草履取（ぞうりとり）」という役名で佐野の名を見つけました。とはいえ、ここで教えていたオランダ人教師・カッティンディーケさんの日記には、「入ってきた生徒のうち、身分の低い者のほうが熱心で、勉強もよく出来た」と書かれています。

当時の長崎海軍伝習所を描いた絵には、出島も描かれていますが、現在埋め立てられて様子が変っています。今も長崎に行くと、あらゆるところに名残りの場所があり、当時が偲ばれます。

長崎では現在、「観光丸」という船に乗ることができます。この船は佐野鼎たちが伝習所で学んだ練習船を同じ大きさで造ったレプリカです。こういう船で彼らは船の動かし方を学んだわけですね。小栗さまと佐野鼎は、江戸から明治への大きな転換期に青春を過ごしました。取材を続けていると、当時の日本の若者たちの思想は大きく分かれていたことに気づかされます。開国してはいけない、外国人は野蛮な夷狄、攘夷（外国人を追い払え）という主義主張の人も多かったので、佐野鼎たちのように西洋のことを勉強している若者の中には、「西洋かぶれ」とののしられ、中には暗殺された人もいました。その後、佐野鼎は日本でいちばん大きな加賀藩から西洋砲術の師範としてスカウトされます。まもなく、磐城藩士の娘春という女性と結婚。そして、一八六〇年、三十二歳で万延元年遣米使節団の勘定組頭益頭尚俊の従者として渡米。翌年の文久遣欧使節団にも随行します。

遣米使節と遣欧使節、両方に加わっている日本人は六人で、そのうちの一人、福沢諭吉は咸臨丸に乗り、サンフランシスコから日本に戻っていますから、ワシントンまで行って、その後遣欧使節に加わったのは五人だけとなります。

アメリカから帰国後も加賀藩士として仕事を続けた佐野は、壮猶館という学問所で藩の若者たちに勉強を教えます。

また、水戸の天狗党が敦賀を経由し、京都へ陳情に行こうとしたとき、これを鎮圧する仕事を命じられたのも佐野鼎でした。天狗党の章については『開成をつくった男　佐野鼎』の中で、けっこう気合を入れて書いたのですが、当時、加賀藩は天狗党に対し征伐とか鎮圧というのではなく、武士として敬意を表し、厚遇していました。飢えや寒さに苦しむ一行に対して、衣類や食料を十分に与えるなど、大事に扱っていました。ところが敦賀で彦根藩の手にわたってからは、大変酷いことになっていくのですね。

遣米使節の従者として

遣米使節一行はポウハタン号で渡米しました。この画像は東善寺さんにある模型ですが、こういう蒸気帆船に日本人だけで七七人乗り込みました。七七人と言ってもトップの人達が数人であとは随員と従者が大勢いたわけ

佐野鼎の略歴

1829年（０歳）	駿河（富士市）で出生
1845年（17歳）	江戸、下曽根塾入門
1855年（27歳）	長崎海軍伝習所１期生
1857年（29歳）	加賀藩に召し抱えられる
1859年（31歳）	磐城藩士の娘・春と結婚
1860年（32歳）	万延元年遣米使節従者
1861年（33歳）	文久遣欧使節
1864年（36歳）	金澤　壮猶館　天狗党鎮圧
1867年（39歳）	七尾でパークスらと交渉
1869年（41歳）	七尾語学所にイギリス人招聘
1870年（42歳）	明治新政府に出仕
1871年（43歳）	共立学校（開成学園）設立
1877年（49歳）	コレラに罹患、２日後に病死

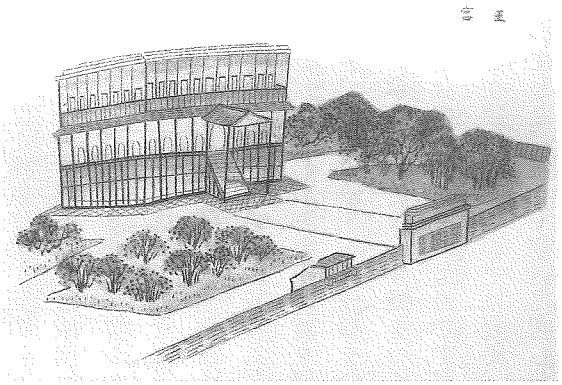
です。日本人だけでなく、アメリカ人の乗組員も三百人近くいましたので、あの船の上に相当な数の人が乗っていたことになります。

結局、日本人がたくさん乗り込んだため部屋が足らず、甲板ににわかに小屋を作ってそこに日本人を乗せていました。

ワシントン海軍造船所（＝ネイビーヤード）を見学したときにアメリカ人たちと一緒に撮った写真（カラー口絵）は有名ですが、真中が正使・新見豊前守正興、向かって左が副使村垣淡路守範正、右が目付小栗豊後守忠順です。

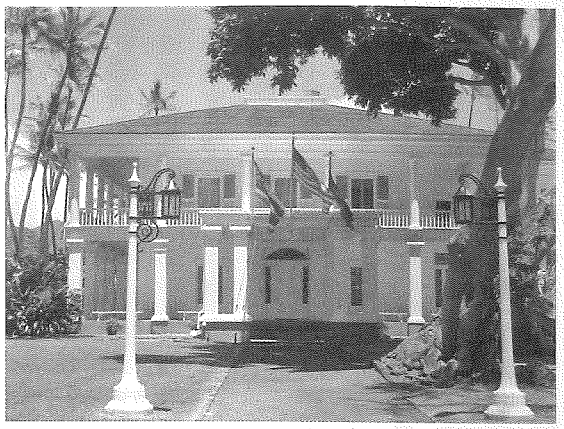
正使、副使、目付にはそれぞれ九人ずつの従者がついています。それに役目を負った随員と従者が付きました。みんな若いですね、三十代前後の若者が多いです。全国いろんな藩から参加していました。

使節団一行が最初に到着したのはハワイのホノルルでした。日本を出てから太平洋で物凄いシケに遭いまして、船が少し故障し、燃料の石炭も消費しすぎたということで、予定外でハワイに寄ることになったのです。



ハワイの王宮　現存しない　・木村鉄太『航米記』

ポウハタン号（模型・東善寺蔵）



ワシントンプレイス

当時のハワイの風景を書いた絵も残っています。私たちは遣米使節子孫の会の研修旅行で現地に行ったのですが、小栗さまの名前が記録されているゲストブックも見学してきました。

彼らが泊まったホテルは、フレンチホテルといいます。ワシントンプレイスという建物は一八四七年に建設されていますから、使節たちも見ているのではないかと思います。古い建物の前にカメハメハ大王の像もありました。日本人が耶蘇堂として描いた教会の建物、初めて見る果物もスケッチが残されています。

使節らはこのとき、カメハメハ王夫妻にもお会いしています。現在、きれいに復元された宮殿を見学することができるのですが、おそらく当時もこういう部屋に通されたのだろうと思われます。

手紙に見る、佐野鼎にとっての小栗さま

佐野鼎がハワイから日本の友人・帰山仙之助に宛てた二月十五日付の手紙が残っています。

「正月二七日夜、北太平洋上大風雨大シケ也　アメリカの上船将コモトールは、二十年間でこのように酷いシケは初めてだと言っていた　新見、村垣両使、及び小栗公は、太平洋の航海が初めてなので、大ヨハリ…」

このように、鼎は小栗さまのことを心配し、日本の友人に向けてわざわざ状況を知らせていました。小栗さまは

鼎にとって、特に気になる存在だったのでしょう。

ハワイの次に寄港したサンフランシスコでは、嵐の中を航海して先に到着し、修理をしていた咸臨丸の一行に再会します。ここからまた友人の帰山仙之助に、三月八日付で手紙を送っています。

「両アンプサードル及小栗公御平安、小栗公初ハ御ヨハリ、当時ハ随分元気、近頃直々船中折々会話、大キニ都合宜敷　木村鉄太も平安、乍去他之従者皆俗人故、学問之事取持不遺、気ノ毒ニ存申候」

（正使副使及び小栗公は平安です　小栗公は航海はじめの船酔いに苦しめられましたが、今は大変お元気です小栗公とは直接に船中で時々会話をしていて、大変うまくいっています　従者の木村鉄太も元気ですが、他の小栗公従者は皆俗人＝凡人ですから、小栗公とは学問のことでは話が合わず、お気の毒に思います　＊意訳村上泰賢）

この当時、サンフランシスコから日本に手紙を出して届くということが信じられないのですが、ちゃんと届いていますね。

手紙の中に、「小栗公はご平安、お元気になられました」とか、「小栗公と直々に会話ができている」という文言が盛り込まれています。

「木村鉄太も平安」と書かれた木村鉄太は、熊本藩士で小栗さまとは安積艮斎（あさかごんさい）の塾で同門、この旅では小栗公の従者として参加しています。佐野鼎とは非常に親しくなったらしいのですが、この旅から帰って二年後に病気のため三十三歳で亡くなっています。

ほかに三月八日の手紙では、新見豊前守さまや村垣淡路守さまには申し訳ないのですが、新見、村垣両使がハワイ王国のカメハメハ四世に謁見した際、「少シ臆シタル様子」で堂々としていなかったと指摘し、目付の小栗忠

順はさぞ「歯カユク」感じたであろうし、「これではワシントン到着後に大統領に会うときが思いやられる」とちょっと冷ややかな目で見た手紙を書いています。

新見様も村垣様も日本の代表として先頭に立たれ、堂々としておられたと私は評価しておりますけれど、たまたま鼎はそう感じたのですね。そして逆に小栗さまを気遣って、「小栗さまは気の毒」と書いています。

佐野鼎の『訪米日記』には、サンフランシスコに到着した時、咸臨丸は修理中で、メンバーは旅館に滞在していて小栗さんもそこを訪ねて一泊したと、書かれています。

「咸臨丸は修理中なるが故に、一統當旅館に宿り、船へは日々當番を以て勤む。監察小栗殿、咸臨丸の旅館に此の夕一泊す。これ諸事示し合はせの為なるべし」（『訪米日記』三月十日）

新見さまや村垣さまの事は書かれていないのに、なぜか小栗さまの行動についてのみ日記に残されているのが興味深いですね。

ポウハタン号での英語学習

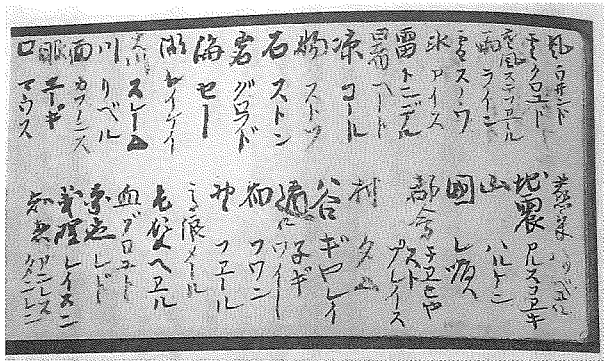
江戸からパナマへ行く途中、ポウハタン号でウッド牧師から英語を学び朝から夕方まで、休みなく勉強に取り組んだそうです。

最近ウッド牧師が書き残した文献が、アメリカで見つかりました。辞書もない中、どうやって日本人が短期間で英語をマスターしたのか、どんな勉強をしたのか、ということをアメリカ側からの記録をもとに日本の英学研究者である石原千里様が懸命に調べてくださっています。

当時彼らが使った『スペリングブック』という本では私たちが中学校などで習ってきた英語の勉強法とは違う学習法です。小栗さまの従者で権田村名主・佐藤藤七の学習記録では、単語を漢字とカタカナで書いています。とにかく外国で、彼らは初めていろいろなものに出会います。パナマではまだ運河がなかったので、パナマ鉄道で大西洋側へ出ました。この時彼らは、初めて蒸気機関車に乗りました。蒸気機関車の模型はすでにペリーのお土産で知っていましたが、実際に本物に乗るのは初めて。木村鉄太の『航米記』にも絵が残されていますし、アメリカ側の記事にも描かれています。こういう汽車で使節一行は運ばれたわけです。

さて初めて乗った汽車の上座（かみざ）はどっちでしょう、先頭車両か後部車両か……、これについては、本の中に書きましたからぜひご覧ください。

とにかく、灼熱のパナマです、途中の駅で休憩したときに出された冷たいオレンジジュースは特別においしかったようです。しかし「なぜ、こんな暑いところに氷があるのか？」というのも驚きだったようですね。



英語学習の記録（佐藤藤七『小栗忠順従者の記録』から）

ワシントンに遣米使節の記念碑建立

日米修好通商条約の批准書をアメリカ大統領に渡すことが目的だった彼らはまず、ワシントンのネイビーヤード（海軍造船所）に到着しました。ここにも二〇一六年に遣米使節子孫の会で行ってまいりました。当時の長官官舎が現在も残っていますが、使節たちは後日、造船所見学でもう一度訪ねた時、そこで休憩し、ブキャナン長官（大統領と同名）からもてなされています。

この造船所見学の使節一行の写真（カラー口絵）では、真ん中が正使・新見豊前守で、この方のお孫さんが大正三大美人と呼ばれた柳原白蓮です。私と同姓ですが、残念ながら縁戚ではありません。（笑）

さて、私たちが子孫の会でネイビーヤードを訪ねた一番の目的は、遣米使節一行が上陸した記念碑の除幕式に出席することでした。一八六〇年に使節団がこの地を踏んだ歴史を残すため、アメリカ側と折衝し、建設して子孫の会から寄附するかたちで許可を得て、ようやく実現したのです。

アメリカ海軍主催の除幕式ということで軍楽隊の演奏がありました。同様の演奏はポウハタン号でも行われたはずです。従者たちは初めて目にした金管楽器のことを、「金の尺八」などと、彼らなりに日本語で工夫して記録していました。

村垣淡路守の後ろで高いシルクハットをかぶっているのが、接待委員のデュポン大佐で、ライターでも世界的に有名なデュポン社を創った一族です。

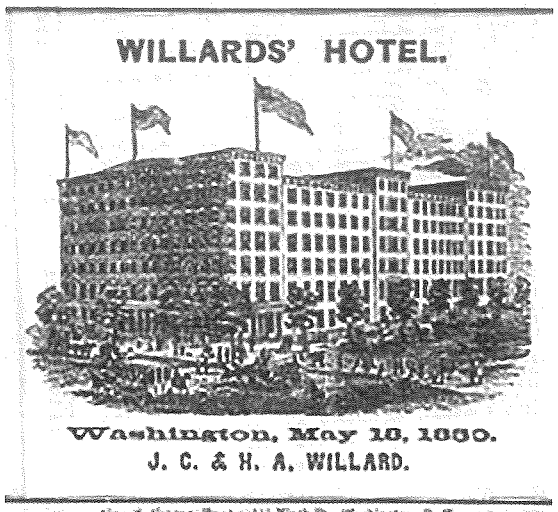
当時、このデュポン大佐に村垣淡路守が白鞘の刀をプレゼントしたのですが、なんとこの日、ご子孫がその時の刀を持って式典に来てくださったのです。そこで村垣淡路守のご子孫・村垣正澄さんとデュポン大佐のご子孫が、刀を真ん中に御対面という場面になりました。

当時の望遠鏡もデュポンさんが持ってきてくださり、私も手に取って、のぞかせてもらいましたが、残念ながらレンズが曇っていてよく見えませんでした。

ここネイビーヤードには、船を修理する当時のドック（口絵）が残っていて、おそらく小栗さまも佐野鼎も一生懸命見学し、「こういうものがこれからの日本にも必要なのだ」という思いを強くしたと思います。

アメリカの高級ホテルに泊まった侍たち

使節一行はワシントンで「ウィラードホテル」という高級ホテルに宿泊しました。当時の建物は改築されましたが雰囲気はあまり変わっていないようです。フロントの様子もほぼ百六十年前のままだそうです。



ウィラードホテル　現在は改築された建物になっている

地下の通路左側に小栗さまたちが食事した部屋がありました。このような豪華なホテルに江戸時代の侍が行ったのですから、さぞかし驚いたことでしょう。佐野鼎の日記には、「風呂の壁から突き出ている鳥の頭みたいなものをひねると熱いお湯や水が出た」といった記述が残されています。たぶんこういう絵の感じだったのでしょう。ベッドや椅子に慣れない彼らは、ホテルの室内でもあぐらをかいて、煙草をくわえる絵もアメリカの新聞に掲載されました。

ウィラードホテルではフルコースで食事がふるまわれました。ナイフやフォークの使い方に戸惑いを感じながら食べた

日本人も少なくなかったようで、ナイフを木村鉄太は「小刀」と書き、フォークは「熊手」のようなものだったと日誌に書いています。

当時、ウィラードホテルで日本人に出された食器は、今もホテルに展示してありました。いきなりこのような高級食器でフルコースの料理が出されたのですから、日本人はびっくりしたでしょうね。たくさんのごちそうが出ましたが、どうも、バターの味は日本人の口には合わなかったようです。

アメリカの新聞ではイラスト入りで日本人のことがたくさん報じられました。ホワイトハウスの南庭園で歓迎のダンスパーティーを報じたり、大統領に会う前のカス国務長官との面談の様子を報じたりしています。

これはホワイトハウスでブキャナン大統領と面会する場面ですが、日本人にしてみれば大統領がふつうの服装でいるとか、こういう席に女性が胸を開いた服装で参加していることは、すごい驚きでした。また、大統領の官邸だというのに、石垣もお堀もない非常に簡単な造りだということについても信じられなかったようです。

アメリカのナショナルアーカイブス（公文書館）には、使節が運んだ将軍家茂からの文書や贈り物が今も収蔵されています。将軍からの文書は立派な和紙に書かれ、家茂の署名の下に「経文緯武」の印が押されています。

博物館は「見世物小屋？」

私がワシントンでどうしても見学したかったのは、スミソニアン博物館でした。佐野鼎の『訪米日記』や彼の友人たちの日記には、博物館のことがよく記述され、「人の干物があった」と書いてありました。そもそも幕末の日本に「博物館」というものはありません。そのため、博物館が何のために存在するのか理解できなかったよう

です。

実際にスミソニアン博物館に足を運んでみると、当時のままの建物が残っていました。日記に書いてあった通り、壁にはいろいろな鳥や動物の剥製が展示されています。

「家（博物館の建物）の中には戸棚の如きものを数か所に置き、これに玻璃板（ガラス板）を張りたる障子を開閉すべく設く。その中には鳥獣魚亀等凡て奇珍なるものを、或いは肉を抜き乾かし、または焼酎付けなどにし、硝子瓶に入れ、また大いなるものは戸棚を設けて其の中に置き、玻璃障子を以て閉しなどするなり」

「天下万国の奇珍異物ここに集簇す。何の為なるやを考ふる能わず（考えることができない）。按ずるに（思うに）、諸物を多く集めて民衆に示し、人の識見を広からしむものならんか」（佐野鼎著『訪米日記より』）

佐野鼎は早くに、「これは人々の識見を広めるための施設ではないか？」と気づきますが、他の人々は、「これは見世物小屋だ」という見方をしていたようです。

さて「人の干物」を探すと、たしかにありました。そう、ミイラです。子供のミイラが布と一緒に展示してありました。大人のミイラもありました。当時これを見た侍たちの中には、「なんで人の干物を人目にさらす所に置くのだ、信じられない」と怒って日記に書いている人もいましたが、やはり、かなりのインパクトがあったのでしょう。

こうしたさまざまな経験をしながら、使節たちはニューヨークへと移動します。途中のフィラデルフィアで、日本とアメリカのお金の交換比率を改訂するため、小判とドル金貨の全量分析実検を要求して、小栗さんががんばった話は知られているところで、多くの本に書かれている通りです。

佐野鼎はフィラデルフィアでペンシルバニア大学を視察しただけでなく、日本人として初めて将棋を披露して

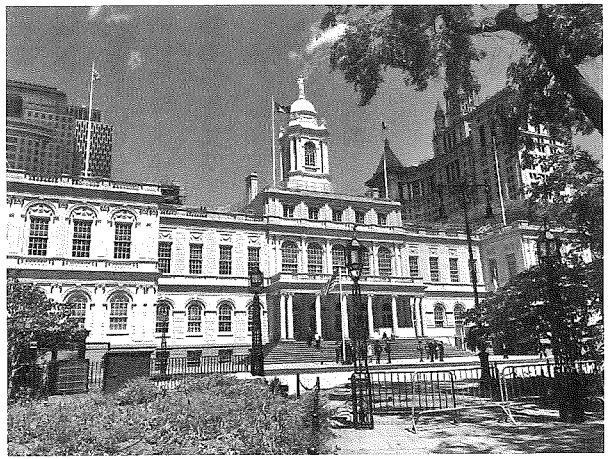
います。フィラデルフィアのチェスクラブが「ぜひ日本の将棋を見せてほしい」と依頼してきたのです。佐野鼎は使節団の中でも、将棋が強かったようですね。「佐野鼎が将棋を打って見せ、『王手！』と言った」という記録があちらに残っています。

使節一行はさらに北上し、汽車でニューヨークへ移動します。当時はまだ、自由の女神像はありませんでしたが、一八六〇年のニューヨークの写真を見ると、すでに高いビルが数多く建ち並び、港には船もたくさんあります。一行はニューヨークの南端のバッテリーパークという丸い要塞のそばに上陸します。この要塞は今でも見られます。佐野鼎は砲術の専門家でしたから、こういう要塞には非常に興味があったと思います。使節が市長を訪ねて挨拶したニューヨークの市役所は現在も残っています。

佐野鼎の日記から、当時の歓迎ぶりを抜粋してみます。

「市中の家屋は各戸商売を止め、日の丸の付きたる旗と米国の旗と並立せしめ、ウエルコムヂアツパネイズ・エムバッセイ（甚だ善き日本使節の到着といへる義なり）と大書し、男女老幼を論せず、各白き片布を振りて祝辞を唱ふ」（佐野鼎『訪米日記』）

この日、お店はみな商売をやめ、店を閉じて日の丸とアメリカの旗を手にし、「日本の使節大歓迎！」と書いた幕を張り、子供も大人も白いハンカチを振って出迎えた、ということです。一行は七十七人で日



ニューヨーク市庁舎

本を発ちましたが、一人病気でサンフランシスコから帰しましたからこの時七十六人でした。

佐野鼎はこうも記しています。

「その群衆、さながら江戸表の山王権現、又は神田明神の祭礼のときに練りものを見学するがごとくにして、群衆はヒレドルヒヤ府に十倍す」(佐野鼎『訪米日記』)

(その群衆はちょうど江戸の山王権現や、神田明神のお祭りの山車や練り物を見学するようで、その群衆はフィラデルフィアの十倍くらいいる)

このとき掲げられたアメリカの国旗と日本の国旗は岐阜県下呂市から賄い方として参加した加藤素毛が持ち帰って、保存されています。この人は収集癖が強かったのでしょう、ほかにも、錠前、トランプ、ギヤマンのビンなどがあり、下呂市の加藤素毛記念館で見学することができます。

アメリカの新聞が報じた日本人

アメリカの新聞はこぞって日本人のことを書きましたが、中でも佐野鼎のことはよく取り上げられています。例えばニューヨークのアップルトン書店に入った佐野鼎たちを取材したこんな記事があります。

「主な役人の一団体が、チャールズ・レイランドに付き添われて、アップルトン書店に行った。そこでの本の選択は、SANOによって行われた。彼は昨夜、ホテルのフレスコ画の説明を上手に翻訳した人物である。その本屋で使節たちはチャンピン博士に会ったが、彼はSANOがおこなった本の選択に喜ぶというよりはむしろ驚き、SANOが示した知性と教養に感銘した」(一八六〇年六月十九日付『ニューヨーク・ヘラルド』)

当時、アップルトン書店が入っていた建物は、今でもニューヨークに残っていますが、この本屋さんでの本の選択が非常に良かったのでしょうね。

また、『ニューヨークにおける日本人』と題したこんな記事もあります、

「佐野鼎は、役人の中でもっとも聡明な人物の一人で、英語に多大な進歩を示し、情報を得ることにたいそう興味を持っている。佐野は土曜日に手話術用のアルファベットを習ったが、彼によれば、手話法はまだ日本では知られていないという。彼はガヴァナーズ・アイランドを切に訪れたがっており、戦術に関するたくさんの書物を探し求めていた。佐野は土曜日に手話術用のアルファベットを習ったが、彼によれば、手話法はまだ日本では知られていないという。」(一八六〇年六月二十五日付『ニューヨーク・タイムズ』)

佐野鼎が盲学校など障害者の学校を見学に行っていたことがわかります。彼は、初めて手話教育についての記録を残した日本人としても評価されています。

当時の彼は戦術の専門家ですから、それに関する本も求めていました。

「佐野は、同じような知性を持った五、六人の随行員と共に、異国の地にあって自分からは何もしようとしない大使を山ほど集めるよりも、日本人たちにわが国(アメリカ)に関する、はるかに正しい知識を与えてくれるであろう」(アメリカの新聞名不明/『佐野鼎と共立学校』学校法人開成学園より)

この記事に登場する「五、六人の随行員」は、おそらく長崎海軍伝習所時代からの仲間を含むメンバーだったのでしょう。そんな彼らは、いつも行動を共にしながら、各都市を歩いたのだと思います。

万延元年遣米使節に関しては、東京タワーを見上げる、芝・増上寺の門の向かい側に記念碑がありますので、東京へ行かれたらぜひご覧下さい。

シンガポールで出会った漂流民・音吉

佐野はこの翌年、文久遣欧使節にも参加していることはすでにお話した通りです。このときは、福沢諭吉もメンバーの一人でした。ロシアやイギリスにも足を運んでいます。

この旅路の中で、一行がシンガポールに立ち寄った時、日本人漂流民だった音吉という人物が使節団を訪ねて会いに来たエピソードは印象的です。音吉の人生は波瀾万丈で、十四歳ごろに乗っていた船が難破し、太平洋を十四ケ月間もさまよって、十三人いた仲間が三人だけ生き残り南米に到着します。そこから実に大変な人生を歩むのですが、頭がよかったのでしょう、いろいろな言語をマスターし通訳として仕事をしていました。

実は彼は一度、日本に帰ろうとしました。ところが、乗っていた商船・モリソン号が軍艦と間違われ日本からいきなり砲撃されてしまったのです。結局、音吉は懐かしい日本を目の前にして帰国をあきらめざるを得ず、シンガポールで一生を終えることを覚悟したのです。

そのようなわけで、私はシンガポールにも取材に行ってきました。音吉は同地で亡くなっており、お墓も現地にあります。情報を得てその場所へ行くと、音吉の幼い娘のお墓がありました。その墓碑には、「四歳九ケ月六日」「エミリー・オトソン」と刻まれていました。音吉は異国の

音吉（ジョン・マシュー・オトソン）

地で家庭を持ち、女の子を授かったのに、わずか四歳でその子を亡くしていたのですね。父親としての深い悲しみが、この墓碑に刻まれているようで、胸を打たれました。

実は、偶然ですが、佐野鼎も幼い娘を失くしています。その命日が音吉の娘と同じ十一月十一日というのも、偶然ではありますが何とも言えないものを感じました。

音吉は、多くの外国人に影響を与えており、最近そのことを研究した篠田泰之氏著『音吉伝』が発刊されています。幕末史において大変興味深い人物なので、ぜひネットで検索してみてください。

文久遣欧使節はスリランカにも立ち寄っています。スリランカのゴールという場所には、世界遺産に登録されている雄大な要塞があります。元々オランダの植民地だったのですが、当時はイギリスが奪い取って支配していました。おそらく佐野鼎たちは、西洋列強に植民地支配されたらその国がどうなるかを痛感したことと思います。

佐野鼎も製鉄所建設を進めていた

加賀藩が佐野鼎を採用するとき、もう一人、村田蔵六（大村益次郎）を候補として挙げていたという事実はあまり知られていませんが、藩の記録にはそのことが残されています。最終的に、佐野鼎が選ばれたわけですが、佐野鼎が加賀藩で教育した教え子の中には、アドレナリンを発見した世界的な科学者・高峰譲吉、現在の理化学研究所を作った櫻井錠二をはじめ、優秀な人材が多数輩出されています。

また、佐野鼎も小栗さまに続いて、能登半島の七尾に製鉄所（造船所）を作るべく準備を進めていました。加賀藩から佐野鼎らが横須賀製鉄所に視察に行った記録も残されています。

結果的に維新後、藩がなくなったことでこの計画は立ち消えとなり、佐野鼎が外国から一生懸命集めた機械類は兵庫に運ばれ、後に川崎重工業の礎となっています。

明治三（一八七〇）年、佐野鼎は明治新政府から兵部省への出仕を命ぜられます。鼎が籍を置くことになった造兵司は、もともと旧幕府が鉄砲や大砲などの製造と修理を担うため一八六二年に作られた「関口製造所」（現在の東京都文京区）でした。この土地が工場地として選ばれたのは、神田川上水から神田川に分流する堰があり、水車の設置に適していたから、つまり、大砲の砲身に穴をあけるために必要な大型ドリルを動かすため水車の動力が不可欠だったからです。

実は、この工場で当初「鉄砲製造」の責任者に任ぜられたのは小栗さまでした。これは私の推測ですが、佐野鼎は尊敬する小栗さまが新政府軍に理不尽なかたちで命を奪われた後、自身が新政府に出仕することに戸惑いながらも、心の中では小栗の面影を追っていたのではないかと思うのです。以下は、拙著『開成をつくった男　佐野鼎』（P278）からの抜粋です。

〈新政府は小栗を斬首し、葬った。鼎は、小栗の魂が込められた場所に、自分が新政府の官僚として出仕することは、その屍を踏みつけるかのような無礼な振る舞いに思えてならなかった。〉

「人を仕立てる」を目標に

新政府に出仕していた佐野鼎は二年足らずでその職を辞し、教育の道へとシフトして「共立学校（現在の開成学園）」を創立します。これはつい最近分かったことなのですが、創立当時の教師陣は皆、奥羽越列藩同盟に属

していた藩の出身者でした。また、天狗党に関係していた水戸藩の者もいました。佐野鼎は明治の世になっても薩長閥にはなじめず、小栗さまをはじめとする幕臣たちへの尊敬の念を忘れることなく、旧幕府側とのつながりを大切にしていたのではないかと思うのです。

小栗さまと佐野鼎の共通点を改めて振り返ると、日本近代化のためには造船所や製鉄所が必要だと痛感していたこと、そして、人材の育成がなにより大事だと真剣に考えていたことではないでしょうか。

佐野鼎はヨーロッパから友人に宛てた手紙の中で、「人を仕立てることが肝要にございます」と述べています。「人を仕立てる」という言葉は、結果として彼の晩年のキーワードとなりました。そして、鉄砲や大砲を造り戦争をすることよりも、「人を仕立てる＝教育する」ことの大切さに気付いた彼は、明治四年、現在のお茶の水に「共立学校」を創立します。これが現在の開成学園になるのですが、当時は男女共学で、三歳や五歳という小さな子供たちまでもが、外国人教師から英語を学んでいたといいます。佐野鼎の息子や娘、姪たちもこの学校の生徒でした。

残念ながら、佐野鼎は明治十年に大流行したコレラに倒れ、四九歳で亡くなります。まさにこれから、というときにさぞ無念だったことでしょう。その後、関東大震災で学校は被災し、現在の西日暮里に移転しました。当時の学校跡地には、現在「ワテラス」という立派な複合ビルが建っており、その敷地内には開成学園発祥の地を示す記念碑が建立されています。

二〇二一年秋には、東海道新幹線の新富士駅前に佐野鼎の立派な顕彰碑が完成しました。生まれ故郷の富士市の人たちにも、ようやくその功績が認められ、二〇二二年からは、富士市の中学校の教科書（副読本）に佐野鼎のことが掲載されることになりました。佐野鼎が地元の偉人として教科書に載るということは、大変意義のある

ことだと思います。

佐野鼎は今、東京の青山霊園に眠っています。教え子たちの活躍を見届けられなかったことは残念でしたが、「人を仕立てる」という彼の思いは、今の世にしっかり息づいていると感じます。

今後も、日本初の遣米使節として小栗さまをはじめとする彼らが、日本の近代化のために残した功績をしっかりと調査し、伝えていければと思っております。そして、小栗まつりにはまたぜひ参加させていただきたいと思っております。

本日はありがとうございました。（拍手）

佐野鼎を掲載した富士市の副読本

リエージュ製エンフィールド銃 報告書

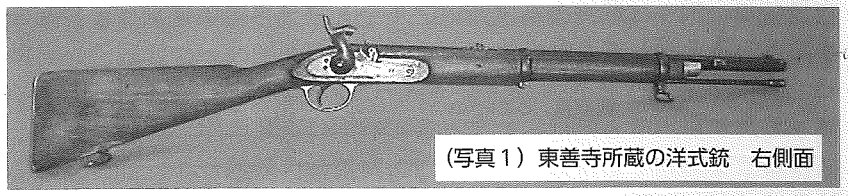
火縄銃構造解析研究会・日本銃砲史学会
峯田元治・瀧上昭治

東善寺所蔵銃について

過去、「東善寺所蔵」とされている銃砲については、和製拳銃（未完成品？）を、米国コルト・ネイビー拳銃の模造を企画し、試作に挑戦したものと報告している。(1)(2)

またかなり傷みのある火縄銃が小栗上野介忠順の父、11代「小栗又一忠高」の手による製作の火縄銃として新発見報告し、修復もしてきた。(3)

しかし、まだ洋式銃２挺を未調査のまま残していた。今回の調査目的は当該銃の製造国名と、製造会社名を明確にすることを主目的にした。平成３年（2021）11月27日、東善寺に村上泰賢住職をおたずねし、その場で銃の分解をこころみるが諸道具が合致せず、ひとまず１挺をお預かりして、解明することにした。



（写真１）東善寺所蔵の洋式銃　右側面

(1)　全体所見

東善寺の銃は全体の形状から英国制式エンフィールド銃である。(4)

前装銃、管打ち式（雷管式）、単発、剣留があることから着剣可能であり、軍用銃である。

銃剣はヤタガン式である。エンフィールド歩兵銃の仕様は全長1250mm。(4)(5)

【ただし全長1397mm、1853年制式三つバンド、英国製とするものがある。(6)】

東善寺の銃は計測全長（1019mm）1020mmであることから、歩兵銃より230mm短い砲兵銃である。ここでは特に腔綫（施條・ライ